

ぼくのこと わたしのこと

(特別活動)

対象：小学高学年以上

1 本時の主眼

資料「ぼくのこと わたしのこと」を読んだ子どもたちが、こころの性とからだの性が一致しない人のことを想像し、当事者の手記からまわりの無理解によりいじめにあってきたことを読み取ることを通して、性同一性障がいとその当事者の思いを知り、その当事者に寄り添った自分のかかわり方を考え、生活に取り入れようとする事ができる。

2 本時の位置

前時…男らしさ女らしさではなく自分らしさを大事にすることを考えた

3 人権教育の視点

- こころの性とからだの性が一致しない性同一性障がいについて知る。(知識)
- 性同一性障がいの当事者がどんな思いで日々生活しているかを知る。(知識)
- 当事者の思いに寄り添い自分のかかわり方を考える。(価値・態度)

4 指導上の留意点

- この教室にも当事者がいるかもしれないと考え真剣に語り合える場を設定する。

5 展 開

段階	学習活動	予想される児童・生徒の反応	指導・助言	時	備考									
導入	1 「ぼくのことわたしのこと」を読んで、この二人のことを想像する。	ぼくのこと ・ぼくって言うから男の子。 ・野球やカンけりが好き。 ・ワンピースの水着を着るのは女の子だけど、どういうことだろう。 ・本当は女の子かも。 わたしのこと ・こちらは私だから女の子。 ・おかしづくりや小物づくりが好き。 ・水泳パンツをはくのは男の子だけどどういうことだろう。 ・本当は男の子かも。	・ワークシートにどんな子か書くように指示する。 ・「ぼく」「わたし」それぞれに、書かれている情報を整理し、二人の性別について想像するよう指示する。 ・子どもが持った疑問について明確に位置付ける。	10	・資料「ぼくのことわたしのこと」 ・ワークシート									
女の子っぽい男の子や、男の子っぽい女の子のことを考えよう														
展開	2 性同一性障がいを知る。	・体が男だったらみんな自分は男だって思っていると考えていたけど、そうではない人がいるんだ。 ・自分とは違うから、わかんないな。 ・テレビに出ている〇〇さんたちのことかな？	・心の性と、体の性に分けて図示する。 ・心の性と体の性が一致しない状態が続くことを「性同一性障がい」と言うことを伝える。 ・障がいではなく、異性へのあこがれの場合もあるので注意する。 ・資料の「ぼく」「わたし」はどうか考え、左のような表で説明する。	10										
		<table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td></td> <td>からだ</td> <td>こころ</td> </tr> <tr> <td>「わたし」</td> <td>男 性</td> <td>女 性</td> </tr> <tr> <td>「ぼく」</td> <td>女 性</td> <td>男 性</td> </tr> </table>		からだ	こころ	「わたし」	男 性	女 性	「ぼく」	女 性	男 性			
	からだ	こころ												
「わたし」	男 性	女 性												
「ぼく」	女 性	男 性												

		当事者の思いを読み取り、自分はどうしていきべきか考えよう			
	3 春奈さんの手記を読んで、どんな思いで生きてきたか考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園のころから、自分は女の子だと思っていたんだ。こんなに早くからそう思っていたことに驚いた。 ・小学校、中学校で、たくさんいじめられていてひどい。 ・テレビの〇〇さんたちもいじめられていたかも。 ・性同一性障がいの人だって知らないから、女っぽい変な子だっていじめられてしまうのかな。 ・今は、女性として堂々と暮らしているんだな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手記を読んで、春奈さんがどんな思いで生きてきたかにふれて感想を書くよう指示する。 ・春奈さんは心が女性、体が男性であることを確認。 ・いじめられていた事実と、「まわりと違うこと」がいじめの理由になってしまっていたことを整理。 ・なぜいじめになるのかも考えさせたい。 ・身近に引き付けるため、メディアで登場する人たちのことも紹介することもある。(混同に注意する) 	15	春奈さんの手記
まとめ	4 自分のまわりに「ぼく」「わたし」「春奈さん」のような人がいたらどうするか考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・今まではテレビで見て笑っていたけど、春奈さんの手記を読んで、その人の気持ちをわかるようにしたい。 ・前の時間のように、男とか女ではなく「自分らしく」学校生活ができるよう支えたい。 ・困ったことがあったら一緒に考えていきたい。 ・「女みたい」「男みたい」って友だちをバカにするようなことは言わないようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに書かせる。 ・グループで、少し話合わせる。いくつかのグループに発表させる。 ・対応についても子どもたちのプランがあれば大事に位置づけたい。 ・春奈さんのような子が身近にいるいないではなく、今からできることについても、(もし、いたとしたらどうするか)考え合いたい。 	10	

【参考資料】

性同一性障がい (Gender Identity Disorder:GID)

「からだの性」と「こころの性」とが一致しない状態で、自分の体の性を強く嫌い、その反対の性に強く惹かれた心理状態が続く。

からだの性は男性、こころの性は女性 male to female (MTF)

からだの性は女性、こころの性は男性 female to male (FTM)

に分かれる。

性同一性障がいと性別違和

2013年5月に公開されたアメリカ精神医学会の精神障害／疾病の診断・統計マニュアル第5版(DSM-V)では、性同一性障がいを指す「Gender Identity Disorder : GID」が「Gender Dysphoria」に変更された。2014年5月、日本精神神経学会は「Gender Dysphoria」を「性別違和」と訳した。(中略)

GID(性同一性障がい)学会では、DSMの改訂前から擁護に関する委員会を設置して情報収集を行っている。「障がい」とあえていわなくても、治療が健康保険の適用で行うことができる国になっていれば、「障がい」は削除されることが望ましい。

「学校の中の「性別違和感」を持つ子ども 性同一性障害の生徒に向き合う」

中塚幹也：(岡山大学ジェンダークリニック GID学会理事長) 著 より

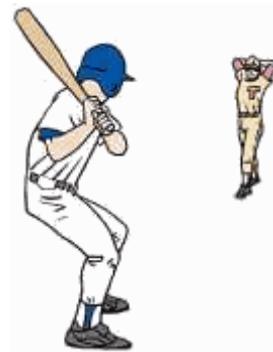
「ぼくのこと わたしのこと」

「ぼくのこと」

ぼくは野球が好き。大きな声で「ナイスバッティング」とか「バッチ、来ーい」って言いながら試合をする。バッターボックスの緊張感がたまらない。本当は、高校野球みたいに「ぼうず頭」にしたいくけど、お母さんが「だめ」っていう。

それから、友だちと「カンけり」をするのが大好き。近くのお宮で、暗くなるまで思いっきり走り回る。こま犬のかげから、ダッシュでカンをけりに行くのがたまらない。

茶色のランドセルで、黒っぽいTシャツに、ジーパンをはいて学校に行くのがいつものぼくのパターン。



でも、ワンピースの水着で泳がなくてはいけない水泳の時間がたまらなくいやなんだ。ぼくは水泳パンツで泳ぎたいんだ。

「わたしのこと」

わたしはピアノを習っている。5才からやっているの、今はもう、学校で伴奏を任されることもある。

それから、おかし作りが得意。クッキーは、「サクサクだね」ってほめられるほどの腕前になった。今は、シフォンケーキ作りに「はまって」いる。ふわふわの焼きあがりがかつてもむずかしいけど、うまくできた時の「おいしい」っていう家族の喜ぶ顔がたまらなくうれしい。

どっちかという、家の中で過ごすことが好き。大好きなネコのぬいぐるみを抱きながら、本を読んだり、布の小物を作ったりするのもわたしのうれしい時間。



でも、水泳パンツで泳がなくてはいけない水泳の時間がたまらなくいやなんだ。わたしは恥ずかしいから、ワンピースで泳ぎたい。

春奈さんの手記

1959年(昭和34年)7月誕生。男の子の誕生で、家族・親戚しんせきから喜ばれ、祖父が「政幸」まさゆきと名付ける。

保育園卒園まで

着る物の多くは、近所の女の子のお下がりだったが、わたしは自分のことを、「女の子」だと信じていたので、女物を着ることが当然だと思っていたし嬉しかった。ただ母は、女の子のお下がりとはいえ、スカートを履かせることは無かったと言っていた。しかし、わたしは母に「スカートを履きたい」とだだをこね、母や保育士さんを困らせたという。

小学生のころ

相変わらず、女の子のお下がりを着て学校に通っていたが、「おとこおんなだ」と言われ、いじめを受けた。「だって、わたしは女の子だもん」と思いながらも言い返せなかった。

トイレや身体測定などが男女別々になり『わたしだって女の子なのに』と思いながらも、女の子の列に入れない自分に悲しくなってしまう。

高学年になっても、いじめは続いた。無視、悪口、物かくしをされ、つらかった。わたしは担任の先生や、強い女の子に助けを求めたが、そのことがいじめを加速させ、ますます男の子からのいじめが多くなった。

修学旅行、遠足、音楽会など、いろいろな行事があったが楽しい思い出はなにも残っていない。

中学生のころ

貧しい中、両親がお金を工面して買ってくれた、男子の学生服や体操着を着るのがイヤだった。

同じ小学校から入学した生徒も多く、1学期も終わらないうちに、わたしはクラスのほとんどの人からの、いじめの的になってしまった。

2年生のとき、女の子っぽい仕草のわたしに、「女子の制服を着ろ」と、ブラウスとスカートを渡された。「イヤ」と言うと、男子から何度もお尻をたたかれた。たたかれるのがいやで、「着るから、もうたたかないで」と言って、しかたなく着ると、「やっぱりこいつは女だ、女だ」と笑って、隣のクラスまで連れて行かれて、見せしめにされた。わたしは女の子だけど、いじめで女子の制服を着せられることはイヤで悔しかった。体操着のときもあった。こんないじめをしばしばうけた。

その数日後、「わたし、そんなに強くないよ。本当の女の子だったらいじめられないのに」と、左手首にカミソリをあてた。脈を外してしまい、死ぬことができなかったが、血はたくさん出た。あまりの痛さに自分で治療をしたのだが、「わたしは、死ぬこともできない情けない人間だわ」と、自分のことを徹底的に責めるようになった。

小学校以上に、楽しい思い出は、なにひとつ残っていない、いじめ抜かれた中学生時代だった。しかし、どんなにいじめられても、それでもわたしは学校に通い、希望する学校に進学した。

高校生のころ

わたしは、わたしをいじめた生徒たちが行かない、隣の市の高校に進学した。制服もなかった。フォークソングが最も流行した時代だったので、長髪で、女の子っぽい服装で通学しても、変に思われず、先生からしかられることもなく、性別を意識しないで高校生活を送ることができた。

この高校時代、自分の一生にかかわる、大きな出来事が二つあった。

一つは、生涯の友となる女子と知り合えたこと。彼女はわたしのことを女子として認めてくれた。彼女には勉強のこと、個人的なこと、何でも相談できた。50歳近くになったわたしが、性同一性障がい^{レズビアン}の治療をしたいと言うと、「ずっと応援しているからね」と、心から理解してくれたのだ。

二つ目は、野球部の男子を好きになったこと。男子を真剣に好きになり「やっぱりわたしは、女の子なんだわ」と、心と体の性の不一致をうらみ、「好き」と、告白できない切なさに胸を痛めた。

社会人になって

就職して東京に転勤。会社には男の姿で行ったが、アパートでは常時、女の子の姿で過ごした。また、外出は、中性的な女物を着用して出掛けた。「これが本来のわたしなのよ」と、嬉しくて楽しかったが、同時に「なぜ、心は女の子なのに体が男なの」と、性別に対する強烈な違和感に耐えられなくなっていった。

2007年(平成19年)、父が肝不全^{かんふぜん}で他界。75歳の若い死だった。父の息子として産まれてきたわたしが、父の娘として送ってあげたかったがかなわなかった。

父の死から数年後、わたしは、性同一性障がいの治療を開始することを決断。カミングアウトの方法も考えた。何も言わず、変質者だと思われて生きていくくらいなら、恥ずかしい思いをしても、「わたしは、性同一性障がいの当事者なの」と、告知する方がいい。そして、2011年、母に話した。母はとても驚いた様子だったが、わたしから、半世紀を超える苦悩を説明すると、「女になっても自分の子どもであることに変わりはない。母と娘二人で、今まで以上に仲良く過ごしていきましょう」と涙を流して理解してくれた。

その後、性別適合手術^{てきごう}を受けることが決まった。わたしは母に報告し、お墓に行き、父にも報告した。「とうちゃん、おこっているかしらね・・・」と、わたしが言うと、「ううん、『優しい、いい娘になるんだぞ』って笑っていたよ」って母。多分、生まれて初めてだと思うけど、母の胸に顔をうずめて思い切り泣いた。

2012年6月18日、手術はうまく行き、裁判所から性別の変更を認めるとの審判結果^{しんぱん}が届いた。わたしは、やっと女の子に戻れたのだ。すぐに会社に報告し、女子社員【春奈】が誕生した。

春奈は今、役場の受付で接客業務をしている。受付は、春奈があこがれていた仕事で生きがいだ。50歳を過ぎてから、やっとなつかめた自分らしさ。母と二人、毎日を大切に生きていこうと思う。

ワークシート「ぼくのこと わたしのこと」 _____ 組 名前 _____

「ぼく」はどんな子だと思いますか？

「わたし」はどんな子だと思いますか？

<性同一性障がいとは？>

春奈さんの手記を読んだ感想を書きましょう。

自分のまわりに、「ぼく」「わたし」「春奈さん」のような子がいたらどうしていきますか